

Crystal Reports XI R2 のインストール ◀

Crystal Reports XI R2 のインストール

Crystal Reports インストール ウィザードは、Microsoft Windows Installer で動作します。このウィザードでは、インストール手順が順を追って提示されます。インストール ウィザードは、使用するコンピュータのオペレーティングシステムを自動的に認識し、必要に応じてファイルを更新します。

この章では、Crystal Reports のインストール方法を順を追って説明するとともに、インストールをカスタマイズする方法についても説明します。次のトピックについて説明します。

- 2 ページの「インストールに必要なシステム」
- 3 ページの「Crystal Reports のローカル マシンへのインストール」
- 5 ページの「インストール元を作成して、ネットワーク サーバーからインストール」
- 7 ページの「インストールのカスタマイズ」
- 9 ページの「サイレント インストールの実行」
- 12 ページの「Crystal Reports コンポーネントのアップグレード」

インストール手順の最終段階で、製品の登録に案内されます。画面の指示に従って、登録を行ってください。

インストールに必要なシステム

最小インストール要件

オペレーティングシステム	Windows 2000 Windows XP Professional Windows 2003 Server
コンピュータ / プロセッサ	450 MHz 以上の Pentium 互換 CPU
メモリ	128 MB 以上の RAM。256 MB を推奨。最大 4 GB。
ディスク容量	最低 1.0 GB。1.5 GB 以上推奨。
ドライブ	CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブ。

注

- .NET コンポーネントには、.NET 1.0 または .NET 1.1 ランタイムが必要です。
- Java コンポーネントには、J2EE 1.3.x または J2EE 1.4.x 互換ランタイムが必要です。

Crystal Reports のローカル マシンへのインストール

サポートされているオペレーティング システム (上記の[最小インストール要件](#)を参照) のいずれかを実行しているコンピュータに Crystal Reports をインストールする場合は、管理者権限を持っている必要があります。インストール処理は、レジストリ エントリを作成し、管理者権限が必要ないいくつかのシステム ファイルを更新します。

Crystal Reports をインストールする際には、現在実行しているプログラムをすべて終了し、サービスをできる限り停止してください。

インストールする機能を制限する場合は、[7 ページ](#)の「[インストールのカスタマイズ](#)」を参照してください。

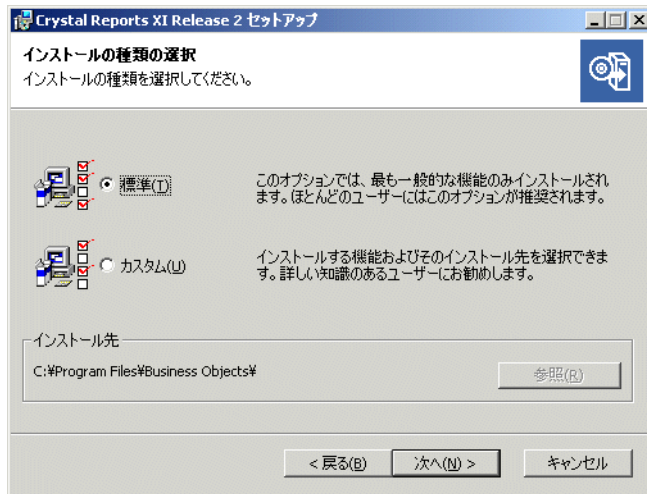
▶ ローカル マシンにインストールする

1. お使いの CD-ROM ドライブで自動再生が有効になっていない場合、製品メディアの win32_x86 ディレクトリから Setup.exe を実行します。

注 現在のシステム設定によっては、ダイアログ ボックスが表示され、既存のファイルを更新するように指示されることがあります。この場合は、[はい] をクリックして、マシンを再起動します。インストール ウィザードによって必要なファイルが更新されます。

2. Crystal Reports のインストールで使用する言語を選択します。
3. 使用許諾契約を読み、それに同意してインストールを続行します。
4. [ユーザー情報] ダイアログ ボックスにユーザー名、会社名、製品キーコードを入力します。
5. [次へ] をクリックします。

[インストールの種類の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。



6. 実行するインストールのタイプを次の中から選択します。
 - [標準] は、最もよく使用されるアプリケーション機能をインストールします。
 - [カスタム] を選択すると、インストールする機能の選択、インストール場所の指定、および各機能のインストールに必要なディスク容量の確認が行えます。詳細は、7 ページの「インストールのカスタマイズ」を参照してください。
7. Crystal Reports をデフォルトのインストール先以外のディレクトリにインストールする場合は、[参照] をクリックします。

Crystal Reports のデフォルトのインストール先は、C:\Program Files\Business Objects\ です。

8. [次へ] をクリックします。

[インストールの開始] ダイアログ ボックスが表示されます。

注 インターネット接続のあるマシンに Crystal Reports をインストールする場合は、自動 Web アップデート サービス機能を無効にすることもできます。これは、Crystal Reports を起動するたびにアップデートやサービス パックを確認する機能ですが、いったん無効にすると後で有効にすることはできません。

9. [次へ] をクリックして、ローカル ハード ディスクへのファイルのコピーを開始します。

インストール元を作成して、ネットワーク サーバーからインストール

ネットワーク上の一箇所から Crystal Reports をインストールするには、次のようにします。

1. ネットワーク上のサーバー マシンに Crystal Reports 製品メディアのコピーを作成します。このコピーがインストール元になります。[5 ページの「Crystal Reports のインストール元を作成」](#)を参照してください。
2. ワークステーションからサーバー マシンにアクセスし、Setup.exe を実行して Crystal Reports をワークステーションにインストールします。[6 ページの「Crystal Reports のネットワークからのインストール」](#)を参照してください。

Crystal Reports のインストール元の作成

この手順は、ネットワークへの書き込みアクセス権限を持っているネットワーク管理者が実行する必要があります。この手順を終了すると、エンドユーザーは、ネットワークから Setup.exe にアクセスして、Crystal Reports をそれぞれのローカル マシンにインストールできるようになります。

注 ユーザーのマシンに Microsoft Windows Installer が構成されていない場合は、ワークステーションのオペレーティング システムが検出され、適切な Microsoft Windows Installer パッケージがインストールされます。

▶ インストール元を作成する

1. ネットワーク上にフォルダを作成し、このフォルダを、Setup.exe を実行する必要があるユーザーに対して共有にします。
2. Crystal Reports 製品メディアの内容全体を、手順 1 で作成したフォルダにコピーします。
3. このフォルダから Crystal Reports をインストールする必要があるユーザーにアクセス権を割り当てます。

注 このフォルダに対するアクセスを制限して、ライセンス数の上限を超えないようにすることができます。

Crystal Reports のネットワークからのインストール

ネットワーク管理者がネットワークに対して Crystal Reports をコピーしている場合は、この操作を始める前に、そのネットワークへの読み取り権限を持っていることを確認してください。

サポートしているオペレーティング システム (2 ページの「[最小インストール要件](#)」を参照) のいずれかを実行しているコンピュータに Crystal Reports をインストールする場合は、コンピュータに対する管理者権限を持っている必要があります。インストール処理は、レジストリ エントリを作成し、管理者権限が必要ないいくつかのシステム ファイルを更新します。

Crystal Reports をインストールする際には、現在実行しているプログラムをすべて終了し、サービスをできる限り停止してください。

▶ ネットワークから Crystal Reports をインストールする

1. Crystal Reports のインストール ファイルがあるネットワーク上のフォルダにアクセスします。
2. Setup.exe をダブルクリックします。

注 現在のシステム設定によっては、ダイアログ ボックスが表示され、既存のファイルを更新するように指示されることがあります。[はい] をクリックして、マシンを再起動します。インストール ウィザードによって必要なファイルが更新されます。

3. Crystal Reports のインストールで使用する言語を選択します。
4. 使用許諾契約を読み、それに同意してインストールを続行します。
5. [ユーザー情報] ダイアログ ボックスにユーザー名、会社名、製品キーコードを入力します。

ヒント 管理者に製品のキー コードを問い合わせる必要があります。

6. [次へ] をクリックします。
[インストールの種類の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。
7. 実行するインストールのタイプを次の中から選択します。
 - [標準] は、最もよく使用されるアプリケーション機能をインストールします。
 - [カスタム] を選択すると、インストールする機能の選択、インストール場所の指定、および各機能のインストールに必要なディスク容量の確認が行えます。詳細は、7 ページの「[インストールのカスタマイズ](#)」を参照してください。
8. Crystal Reports をデフォルトのインストール先以外のディレクトリにインストールする場合は、[参照] をクリックします。

Crystal Reports のデフォルトのインストール先は、C:\Program Files\Business Objects\ です。

9. [次へ] をクリックします。

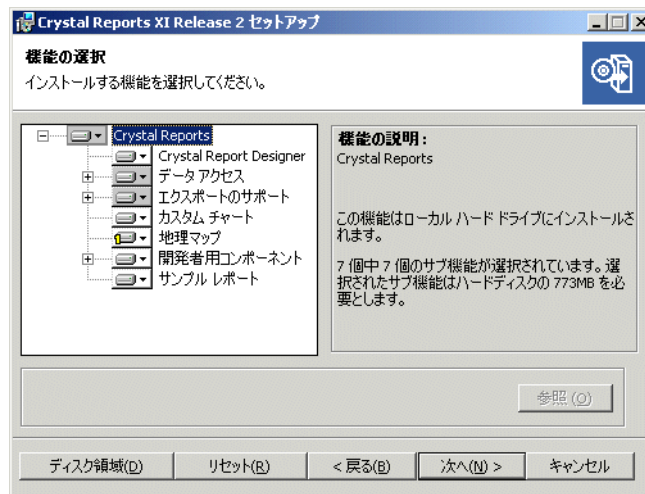
[インストールの開始] ダイアログ ボックスが表示されます。

注 インターネット接続のあるマシンに Crystal Reports をインストールする場合は、自動 Web アップデート サービス機能を無効にすることもできます。これは、Crystal Reports を起動するたびにアップデートやサービス パックを確認する機能ですが、いったん無効にすると後で有効にすることはできません。

10. [次へ] をクリックして、ローカル ハード ディスクへのファイルのコピーを開始します。

インストールのカスタマイズ

カスタム インストール オプションを選択すると、[機能の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスでは、特定の機能をインストールしたり、さまざまな機能のデフォルトの場所を変更したり、各機能に必要なディスク容量を確認することができます。



機能ツリーのアイコンは、機能やそのサブ機能がインストールされるかどうかを示します。

- 白いアイコンは、その機能とすべてのサブ機能がインストールされることを意味します。
- 灰色のアイコンは、その機能と一部のサブ機能がインストールされることを意味します。
- 黄色の 1 は、機能が必要に応じて（オン デマンドで）インストールされることを表します。

- 赤い [X] 印は、その機能とサブ機能が利用できないか、インストールされないことを意味します。

Crystal Reports には、オンデマンド インストール テクノロジを使用する機能があります。その結果、インストール後に特定の機能を初めて使用する際、オンデマンド インストールが完了するまで待機時間が生じる場合があります。この動作は、新規にインストールした場合にだけ必要となり、再度その機能を使用するときには発生しません。

機能またはサブ機能の設定と位置を選択するには、そのアイコンをクリックします。

注 機能やサブ機能には、それぞれ独自の設定と位置を指定できます。

次の表を参考に、それぞれの機能やサブ機能のインストール オプションを決定してください。

機能のインストールの種類	インストール内容の説明
ローカル ハード ディスクにインストールされます。	<ul style="list-style-type: none">• 機能をローカル ハード ディスクにインストールします。• 一部の機能のサブ機能をローカル ハード ディスクにインストールするには、[標準] インストール設定を使用します。
すべての機能をローカル ハード ディスクにインストールします。	<ul style="list-style-type: none">• 機能とそのすべてのサブ機能をローカル ハード ディスクにインストールします。
この機能は、必要な場合にインストールされます。	<ul style="list-style-type: none">• 機能またはサブ機能を初めて使用するときに、それらを CD またはネットワークからインストールします。
すべての機能を使用できません。	<ul style="list-style-type: none">• 機能もそのサブ機能もインストールされません。

注 サブ機能は各機能の下にリストされます。サブ機能には、その新機能と異なる種類のインストールも実行できます。

サイレント インストールの実行

サイレント インストールは、コマンド ラインから実行するインストール方法で、インストール中に情報を指定するプロンプトを表示するインストールプログラムを使用せずに、自動的に Crystal Reports をシステム上の任意のマシンにインストールします。実行するコマンドには、インストール設定とディレクトリパスの情報を提供する一連のパラメータが含まれます。

Crystal Reports のサイレント インストールは、特に、複数のインストールを実行する必要がある、システム上のマシンでユーザーが実行中の作業を中断しないようにする場合に便利です。また、サイレント インストール コマンドを独自のスクリプトで使用することも可能です。たとえば、組織内でソフトウェアをマシンにインストールするためのスクリプトを使用している場合、Crystal Reports のサイレント インストール コマンドをそのスクリプトに追加することができます。

注

- サイレント インストールは、Crystal Reports セットアップ プログラムから使用することはできません。また、経験豊富な Crystal Reports の管理者のみを対象としています。
- サイレント インストールを実行する場合、デフォルトで Crystal Reports エンド ユーザーの使用許諾契約書に同意します。使用許諾契約書のコピーは、製品メディアの Docs フォルダで参照できます。
- サイレント インストールは新規インストールを対象としています。アップグレードには使用しないでください。

サイレント インストール コマンドは、setup.exe コマンドと、インストールに関する情報を提供する複数のパラメータによって構成されます。次の例では、Crystal Reports をインストールします。

```
setup.exe ADDLOCAL=ALL CLIENTLANGUAGE=<%langcode%>  
REBOOT=ReallySuppress PIDKEY=<%keycode%> INSTALLDIR="C:\Program  
Files\Business Objects\Crystal Reports 11.5" /qn
```

注

- <%langcode%> この変数は、次の表に含まれる有効な言語コードに置き換えます。
- <%keycode%> この変数は、有効な製品ライセンス認証キー コードに置き換えます。

この例では、最も一般的なパラメータが使用されています。有効なパラメータはいくつでも指定できますが、サイレント インストールはなるべく単純な形で実行するのが好ましい方法です。

次の表に、サイレント インストールで使用する一般的なパラメータを示します。パラメータを使用するには、setup.exe コマンドに続けて記述します。

注 この表に一覧表示されていないパラメータも使用できる可能性はありますが、テストされていません。テストされていないパラメータはサポートされません。

インストールのパラメータ	説明
CLIENTLANGUAGE=	インストールする言語バージョン コードを指定するために使用します。 <ul style="list-style-type: none">英語版では「EN」と入力。フランス語の場合、「FR」と入力。ドイツ語の場合、「DE」と入力。スペイン語の場合、は「ES」と入力。日本語の場合、「JP」と入力。簡体字中国語の場合、「CHS」と入力。繁体字中国語の場合、「CHT」と入力。韓国語の場合、「KO」と入力。オランダ語の場合、「NL」と入力。 注 このパラメータを入力しないと、プロンプトなしインストールのパラメータを指定していてもインストールの開始時に通常の言語選択画面が表示されます。
INSTALLDIR="filepath"	Crystal Reports をインストールするマシンとディレクトリを指定します。filepath には、インストール ディレクトリの完全パスを代入します。たとえば、「C:\Program Files\Business Objects\Crystal Reports 11.5」です。
PIDKEY=00000-00000000-0000000-0000	製品ライセンス認証キー コードを指定します。
REBOOT=ReallySuppress	Crystal Reports でユーザーに対してマシンの再起動を求めるプロンプトが表示されないようにします。
/qn+	サイレント インストールを実行します。ただし、インストールの完了時にユーザーに対してプロンプトが表示されます。

インストールのパラメータ	説明
/qn	サイレント インストールを実行します。ユーザーに対してプロンプトは表示されません。
ADDLOCAL	<p>インストールする機能の一覧を、カンマで区切って指定します。</p> <p>例：ADDLOCAL=ALL</p> <p>注 この表の EXCLUDE パラメータのいずれかを使用する場合は、ADDLOCAL も使用する必要があります。</p> <p>例：ADDLOCAL=ALL EXCLUDEDRCFILES=1</p>
EXCLUDEDOTNETFILES	<p>.NET 開発者用コンポーネントをインストールするかどうかを指定します。</p> <p>例：EXCLUDEDOTNETFILES=1</p> <p>デフォルト値は 0 で、.NET 開発者用コンポーネントがインストールされることを意味します。値 1 はこれらのコンポーネントがインストールされないことを意味します。</p>
EXCLUDEJAVAFILES	<p>Java 開発者用コンポーネントをインストールするかどうかを指定します。</p> <p>例：EXCLUDEJAVAFILES=1</p> <p>デフォルト値は 0 で、Java 開発者用コンポーネントがインストールされることを意味します。値 1 はこれらのコンポーネントがインストールされないことを意味します。</p>
EXCLUDEDRCFILES	<p>RDC 開発者用コンポーネントをインストールするかどうかを指定します。</p> <p>例：EXCLUDEDRCFILES=1</p> <p>デフォルト値は 0 で、RDC 開発者用コンポーネントがインストールされることを意味します。値 1 はこれらのコンポーネントがインストールされないことを意味します。</p>

注 サイレント インストールを使用して追加できるのは、ライセンスを購入した機能のみです（ライセンス キーで制御されます）。ライセンスを所有していない機能を追加すると、その機能はサイレント インストーラで無視されます。

Crystal Reports コンポーネントのアップグレード

アップグレード製品のキーコードを購入した場合は、インストールプログラムによって、前のバージョンの Crystal Reports は削除されません。通常、Crystal Reports コンポーネントのアップグレードでは、サイド バイ サイド インストール（Crystal Reports の古いバージョンか新しいバージョンのどちらかを実行できるインストール）を実行できます。

注 Crystal Reports XI、Crystal Reports 10、Crystal Reports 9、または Crystal Reports 8.5 からアップグレードする場合には、Crystal Reports XI R2 のサイド バイ サイド インストールがサポートされます。

このサイド バイ サイドの動作は、Crystal Reports および様々なソフトウェア開発キット (SDK) にも当てはまります。Crystal Reports XI R2 for Visual Studio .NET は実行時にサイド バイ サイド モードで使用することができます。つまり、Crystal Reports 10 for Visual Studio .NET を使用して作成されたアプリケーションは、継続して Crystal Reports 10 for Visual Studio .NET アセンブリで実行されます。ただし、Visual Studio の統合はサイド バイ サイドでは実行できません。特定の場合に Visual Studio .NET IDE に統合できるのは、Crystal Reports の 1 つのバージョンだけです。Report Designer Component (RDC) にも同じことが当てはまります。RDC は実行時にサイド バイ サイド モードで使用できますが、IDE 統合はサイド バイ サイドで実行できません。

注 レポーティング環境に関する詳細情報については、製品メディアに収録のリリース ノート (release_en.pdf) を参照してください。